活躍するおもちゃドクター

ケボの会「おもちゃ病院」

東京都多摩市

全国に四百ほどあるとされる「おもちゃ病院」。その一つ、東京都多摩市で活躍するのが、ケボの会「おもちゃ病院」。市内の豊ケ丘児童館で開院された「おもちゃ病院」の最初の患者は、小学一年生の航也君。持ち込んだのは無線ラジコンで動く三輌編成の新幹線。航也君のお父さんによれば、航也君が三歳のとき買ってあげたものだというが、連結部分の接続がおかしくなり動かなくなってしまった。榎本さんたちおもちゃドクターは、さびていた電池端子のハンダを付け直すなどをし、一時間ほどで修理を完了させた。航也君は、操作上の注意を聞きながら、新幹線を持ち帰っていった。

次に持ち込まれたのは時計。一歳半になる男の子を抱っこした若い夫婦が持ち込んだもの。抱っこした赤ちゃんが生まれたばかりのときの写真が入った記念すべき卓上時計だが、針がダメになってしまい、おもちゃ病院を訪ねてきた。診断では、パーツ全部を取り替えなければ、修理は無理との判定がくだされかけたが、「挑戦してみる！」と、坂田さん。坂田さんの発言で、この時計は入院となった。入院とは、その場ですぐに直せないものを持ち帰り修理すること。

そのほかにも、この日は、「野球盤」など十三件の修理依頼が持ち込まれた。一部入院したものもあったが、後日確認をすると時計は

修理され、無事退院し、持ち主に戻されたという。入院した中で、キーボードでLSIの部品が調達できず修理不能となった。このようになかには部品が調達できず、修理ができないものもあるのが悩みだという。

「おもちゃ病院」は毎月一回、市のボランティアセンターなどで定期開院するほか、市内児童館での移動診療所の開催、祭りなどでのイベントにも開院し、約三〇人のおもちゃドクターが活動している。その回数は、年間三〇回ほどになる。修理依頼件数は、昨年で、年間三百件ほどで、そのうち九割は直すことができるという。修理代は無料だが、電池やモーターなど交換をした場合には、その実費をもらっている。

このおもちゃ病院の発足は、五年ほど前にさかのぼる。その母体は、多摩市内で活動する「ケボの会」。住民参加と助け合いの精神のもとに、人生八〇年時代を生き生きとボケないで生きていくために、地域に根ざした様々な福祉のサービスを提供し、すべての人々が健やかに暮らせる地域社会づくりをめざして活動している団体。

このケボの会で、おもちゃを修理する講座を開催し、それに参加したメンバーを中心に立ち上げたのがおもちゃ病院。最初の講座の時には、外部から専門の講師を招聘したが、二回目以降は、自分たちでテキストも作成し、

毎年「おもちゃ講座」を開催している。講座の最初の六回は、おもちゃを扱う際の基本的な注意から始まり工具の使用方法、ハンダ付けの方法などを学び、その後の六回は、ドクターたちと一緒に「インターン」としておもちゃ病院の活動に携わる。

今のおもちゃは昔とは違って、電子部品のかたまり。修理にもさぞ機械や電子工学などの専門知識が要求されるのではと思う。ドクターの中には、技術系の仕事に携わっていた人が多いことも事実だが、技術的なことは、お互いに相談しあいながら修理をしているので、むしろ、「子どもとのやりとりを大切にしている」と、榎本さんたちは言う。

修理品目の一覧表を見ていると実に多種多様のおもちゃが見られる。子どもたちにとって必需品になっているおもちゃを直してくれるドクターたちは、まさに子どもたちにとっても頼りになる人たちといえるのだろう。

連絡先
ケボの会「おもちゃ病院」ホームページ
http://www002.upp.so-net.ne.jp/nel/kbt.htm